

# フィクションとは世界観構築手法を与えるものである

田村 高幸 (Takayuki TAMURA)

千葉大学大学院社会科学研究院

この講演では、ワークショップの要旨に述べたように、研究プロジェクト「存在・真理・フィクションの分析を支える論理構造解明に向けて」を立ち上げ、2年間に10回の研究会を基調講演と総合討論により、開催し、その研究会を通して、「存在」・「真理」・「フィクション」概念の分析を支える論理構造解明に向けての考察を行う際の重要な論点、それは、これらの言葉にいかなる使用を与えているのか、その使用を与えている視点とはいかなるものかが明晰にされていない点がはっきりしてきたのである。このことはまさに、以前から存在概念や真理概念の論理学的分析の背後にある使用、視点がいかなるものであるものかが明晰にされていないことに対して、繫辞 (Copula) や接続 (Concatenation) を用いれば明晰にできるのではないか等の疑問を抱いていたこともあって、私の関心を強く揺さぶる問いとなった。

そこで、10回のプロジェクト研究会の総括とこの論点への回答のためには、次の問い：

「私たちがいかなる事柄によってアスペクト生成、概念生成、意味生成を行っているのか、それを可能にする立場はいかなるものであるのか？」

に答えることが良いと思われた。この問いの基礎には、いかにして世界を見ているのかという世界観をどのように構築するのかという問いが含まれているので、「フィクションは世界観構築手法を与えるものである」ことを示すことによって、この問いに答え、研究プロジェクト総括及び先の論点解決の基礎を与えることが可能となると思われた。

今回の講演では、先の二人の提題者の「表現と解釈の関係の分析」及び「言葉が持つ私たちの持っている視点への影響」の成果、「語の意味は使用である」ということによって示されていること、すなわち、存在がその働きによって特徴づけられること及びそれらに関連する内容を通して、「フィクションは世界観構築手法を与えるものである」を示すとともに、基礎となる世界観の提示を試みたい。